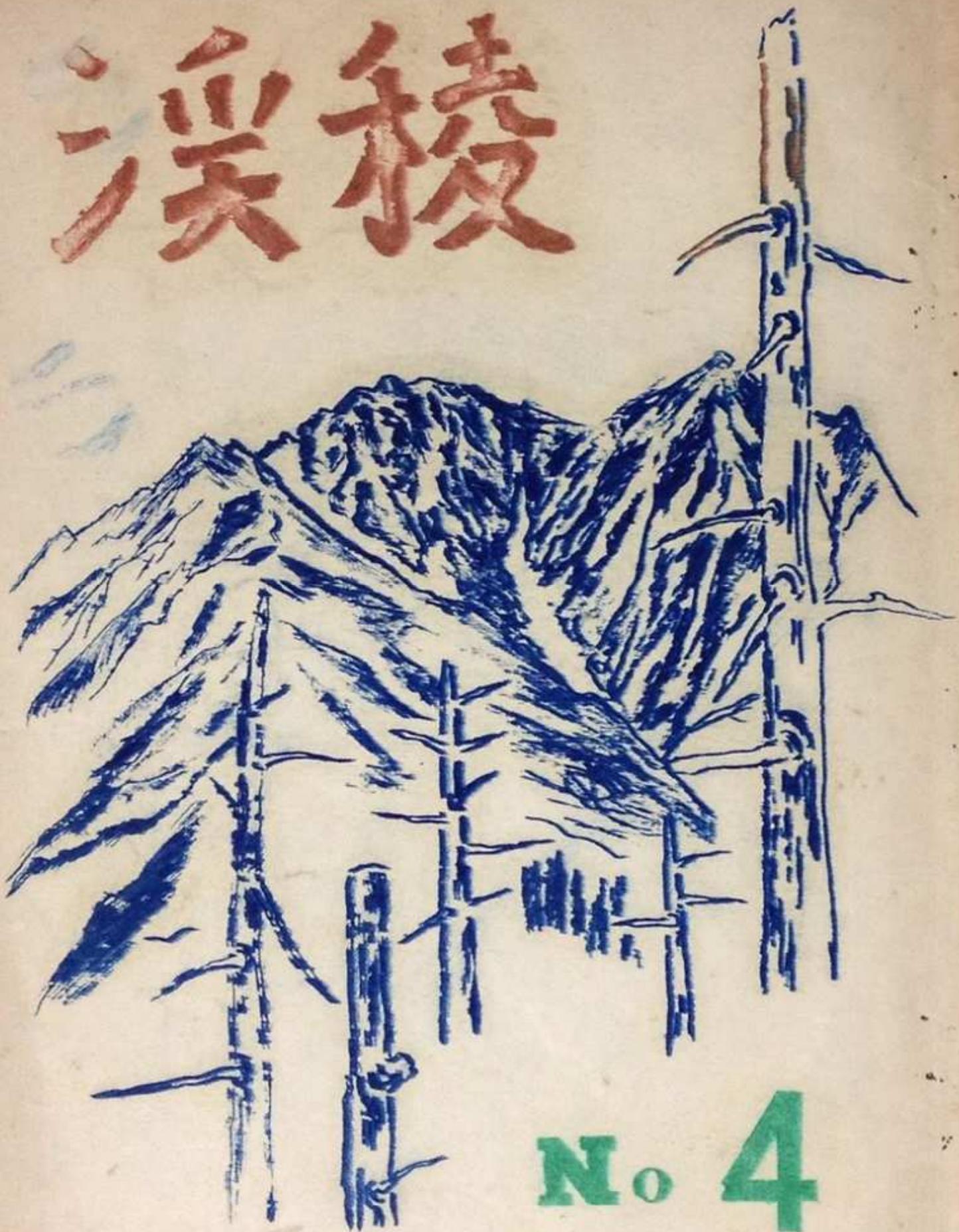


# 漢綴



No. 4

July 1957

# 漫 略

-N0.4-

自然は苛酷だと言うが、それに打ち勝つ事は、自分自身に打ち勝つ事に外ならぬ。

後記

T.G. ロンクスタッフ

辻 藏 書

発足半年 ----- 山縣昌彦(3)

▶ 音楽慢歩(4) ◀

アルプス交響曲 ----- 吉田泰彦(21)

▶ 仲間を語る(3) ◀

県人の素顔 ----- K.T(25)

葛葉川湘行雜記

----- 筒井滿栄(8)

〈山行報告〉

尾瀬へのルート ----- つじ かつしろう(4)

丹沢萬葉川湘行 ----- 進藤澄江(7)

一の倉生活

二の沢右股 ----- 辻勝四郎(12)

滝沢上部・Bランゼ ----- 村田俊満(15)

シャンダム・飛驒尾根登攀

----- 山崎弘一(18)

六月の尾瀬沼 ----- 嶽江資之(20)

▶ 山岳書紹介(2) ◀ ----- M.Y(トロ)

山の料理(3) ----- 筒井滿栄(11)

部長になつた話 ----- 山縣昌彦(22)

紀行 静かな山あるき ----- 吉田泰彦(20)

母校山岳部の歩み ----- (9)

会務報告 ----- (15)

編集後記 ----- (28)

表紙絵 ----- 穂高

溪稜

N04



目次

## 年年足発

昌彦山縣

淡交山岳会が登足してから約半年が経過した。僅かな期間ではあつたが、この間目覚まし、活躍が見られ、会員も四十名に近く、会報も作成は貰得だが、最も大きな内容で四号を数え、山行の程度も小規模ながらも技術的ではかなりのレベルにまで達してある。まことに、会員たちが、今まで今迄の会の活動を反省して見る事も、今後の会の進の方へ役立つのではないか。

一方が卒直に云つて我が会は、山の好きな者が集つて出来た会、それだけのものであつて、革々々、大きな山行を目指とし、或る規格に従つて作った会ではない。従つて技術の程度も可成りの差異がある。又学生、社会人

混合のため、時間的、經濟的制約の面でもかなり多くある。それに又、山男にあり勝ちを孤独癖と、発足以来は、浅いのに、全会員の親睦が未だ十分とは言えない。(勿論、今迄の山行を共にした会員相互の間

には切っても切らず、周々友情が出来て、必ずは、言うまでもないが、) その様な事情の爲め、今迄の山行を振り返つて見ると、メンバーの類型化、固定化と言つた現象が目に付く。即ち一部は先鋒的にどんどん技術をあげていく。他の一方は先鋒派の山行を、或る恐怖の極を感心で見つ、相變らず本の低迷を譲返す。……こんな風にも見えてゐるだけ。

どちらも山を愛し、登山が樂しくいるのだ。然しそと死のすれくの境を行く岩登りのみが登山ではなく、又、いつも安易なハイクに立まって、いるのも眞の登山の精神とは縁遠いものであろう。今更言うのも野暮ながら、吾々は山の呼び声に引かれ、山に於ける困難と闘う事によって自分自身の肉体と精神が高められ、そしてあの山の美しさに没することによつて、生きる喜びと永遠の享福感を味う。あの気持ちを知つたからこそ、心を愛せざるを得なくなつた人間である。この気持ちを知つて居させするならば、山の呼び声を心に聞く事が出来すれば、必ず会員としての資格があると言えよう。

然し、山の呼び声に応えることは、一座、寝に満たされた居ては出来ない。やはり山に入つてこそ出来るのである。所も又より困難を山行に取組んで行つてこそ、登山の醍醐味が味わえるのである。否、氣な單独行も捨て難い味

があるが、氣の合つたパーティでの山行は又樂しく有益である。一人では行き難いがパーティなら、と言ふ場合もある。どうか考査員諸君、こうくな制約をやうくうして、多くの人が山行と共にして欲一。

この際序をねばならぬのは、上級者は常に初級者の指導と言ふ義務を忘れず、又初級者は素直に上級者から技術を学び取つて、いくつも態度を心得なゝ事だ。今までの半年間にには、そういう意味での基礎練習が足りなかつたのではないか。

床の板をさうな陋宅が会場であるが、山語会等にもごんく頑を出し、山の話に花を咲かせ、又或る時は技術の説明などを聞かたりして、平生からもつと親睦をはからう。

とにかく現在までは極めてスムースに動いて来た。今後發展につれて各種の困難が全の前途に現わせて来るところと思うが、山に於いて示すあの勇気と叡知を以つて全員が團結して困難を突破して行つてもらいたい。

## 尾瀬への一ルート

### 湯の小屋より至仏へ

つじかつしろう

水芭蕉の尾瀬、そんな掛声に前かれて一度位は入って見うといふ気になつたものであるが、沼田のあの難路を見ては二の足を踏まざるを得ない。そんなわけで人の歩かなゝ道と当初は狩小屋沢から至仏へ抜ける予穴であつたが現地で他にルートのあることを知つて、如くは湯の小屋よりせん岳、至仏を至て尾瀬入りとはなつたのである。尾根は残雪の急径を見失す、至仏附近では濃霧と冷雨にて、かくて峠々の熊ではあつたが、尾瀬の朝までない薄寂(しじま)を経つて向きて来るカツコウの鳴き声が一八に旅の疲れを癒してくれるのだった。

木上からバスを湯の小屋入口で降り平野な道を歩く事二時間、十一時三十分頃客宿場の小屋に着く。薪を販賣と想像していたが、水上に見つかる人々が皆小屋健が一軒、お父さん新築されていた。此にて小村止の秋の小屋何處か出発したのであつたが程を誤り、二時間又過ぎ小屋に着き昼飯をとる。再び出發の所へ戻って、村人の説により朝の小屋の外にメートルある平を知り、時間の間隔を予定を変更して、その新メートルを辿り着いた。

湯の小屋横の吊橋を渡り玄へとタック道を二合程行くと左側に至り、右へと山道へ入り込む。暫らくはゆるやかな道が終り程も悪くなつた。もや、一時間も登りて程は次第に高くなる。重荷の一洋から順次段階へと轟び出で、（火の吹きまで湯の小屋より五キロ）

北大より段落を越す事一時間強、やがて僅は止陥を越え柱となる。車が登山道へ入り入らなければ程ほほんとし、程は順序面のアカシチーズとなつて走っている。一、ヨリ小沢を横切った後、傾斜計は六時を回つたので坂は近くの傾斜地に桔梗と秋の天幕を擇つた。

夜半未だ眠り散まして見るに何時頃か待てテントの跡に不思議と見え、上から湯の小屋入口（大三）→湯の小屋（十二三）→大三（十三）→湯の小屋（十四五）→宿舎（十六七）→湯の小屋（十五六）→宿舎（十六七）

朝、アコトをなく而立音に目がさめる。大木の下に寝ては誰の聲、雨音も響くしばらく寝転んでいたて時半起床、出でて河手の炊事の用意をする。

此時アコトで起きて、雨足をあたえて人を止んだ。には今もニエの小沢を横切り、途中で野毛池を過ぎた。恰好な人がニエ所程あり、それで天塀が現わ始めた。出發してから二時間程で雪に覆われた峯へと蘇ふ本た。此處から北に向て度根を少し下ると美濃田代ホタル池がある。池のほとりに一つ二つ水芭蕉を白い花を見せていた。一方反対とは思えない、やがて度根を少し下ると美濃田代ホタル池がある。そして岩場が度根が始めて岩を積つてなるも登れば二〇五七、五本ラジを登り山腹に立つ。樹木が全然ないの展望は良ければ又格別である。西方を望むほどの展望から利根川水源一帯の山々、その左側には谷川岳のマケガ派、一、金杖竿、南望すればすぐ同邊かに鶴見山、礫谷原に取れば河源をかぶる山で、その先には日光の連山がその新緑う山腹を覆っている。

笠ヶ岳、今は石牛の山腹を攀ぐ、全く矢張に大三を下田だろう。程ほやがて森林地帯へと入り本の駕籠を荷物に下り、被けるべく荷物を身につけ、一ぱく程を駆逐する。そこには踏跡はなく、人で大きな鳥の足跡だけが踏跡の跡に残るのみである。やがて鶴見山の合流点、今度は木戸川と合流する。

する。道標によれば至仏まで一キロ五十分である。しかし併立

する道標の一方が湯ノ小屋まで十四キロとなつてゐるのにミ。

が、三三キロとなつてあり、そのいふところは

小至仏の笠道は石の上を渡る所である。

小至仏の笠道は石の上を渡る所である。

ヒツケル、アイゼンなしのトランバ一人は仲々樂ではない。しかも知

らぬ間に泥霧がまく、西方面へは冷雨を伴なつた強風が音

を立て、吹下して、遂に頭上のトランバースを中断、脇に

バケツを掘つて尾根へと直す。昼頃には至仏に着くだろ

うとの予測で昼飯も作らなかつた。急に空腹と冷雨にいき

さかみつてモードとなりながら至仏山頂に着いたのが五時半を

。バスに登り、石の上を見まく、山夏、あれで尾根を原へと

下る。途中でガスが切れ、湯原が眼下に見えた。怪しい悪

く小屋が向附近に見えるのが仲々近づかない。遂には終さ

外れてヤマの中に入り込んで、ようやくの事で水を

蕉のほり白く咲く尾根へと足を踏入れた。

かくして今日は野営を断念、小屋泊りにしようと苦色

せま、湯原を渡つて七時歌声垂跡さかな谷界へと足を

踏入れた。

ヘタム<sup>ヘタム</sup> 野営地発(九・三〇) → 尾根に出る(十一・三〇)

↓ 竹ヶ岳(十二・三五) → 至仏山(五・〇〇)  
↓ 山の鳥小屋(七・〇〇)

△ 後記

地元水上観光課関係者の話では狩小屋沢のルートは昨

年より宿泊する事無し、以後藤原口からは我々の手に付いた此のルートを整備して登山道を招く方針だそうである。

未だ一箇所ではある。

度々は二日を要する。

うに小屋泊

りの軽装で湯原の左を早朝に立って、一日行程で尾根に入れる。

道標は全くある。若くどけ下りの時間から記載して、

ハシ村發ち余りあらずに余り多い。昨今おなじひの箱路を走

つ時、二十九人足らず入ることで、人には

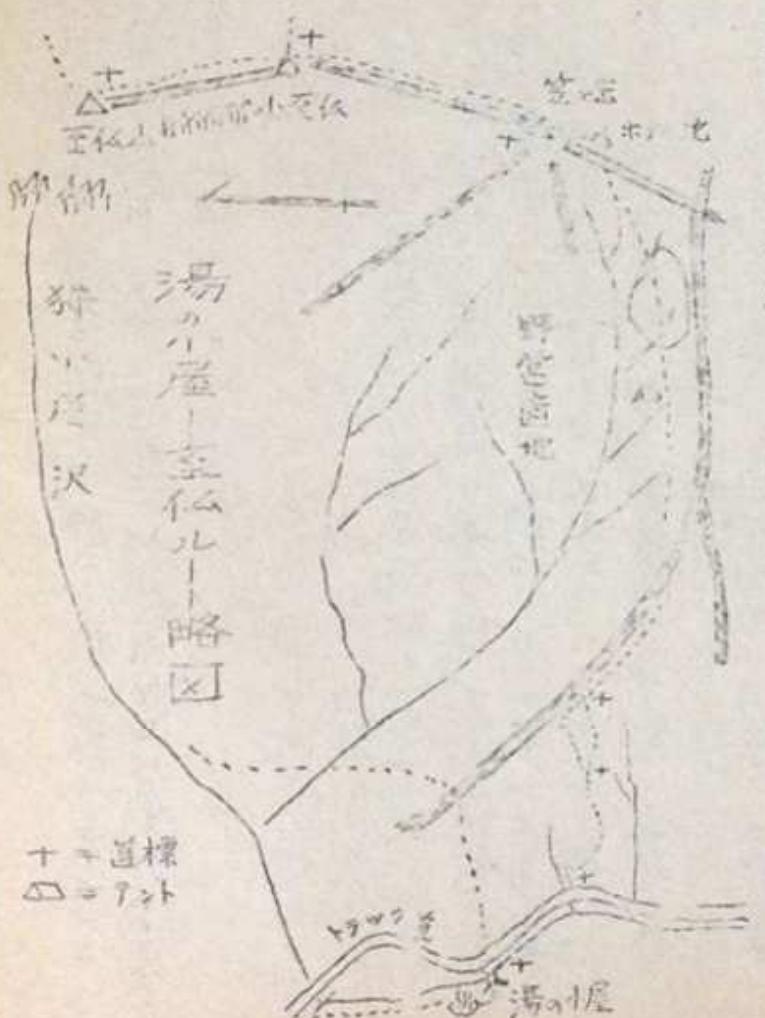
かずかずの氣合を發揮した。

ハハに種類ごと水とえのバスで始まへど、最終

五、一、湯原小屋まで一晩でのり。

ハハに種類ごと水とえのバスで始まへど、最終

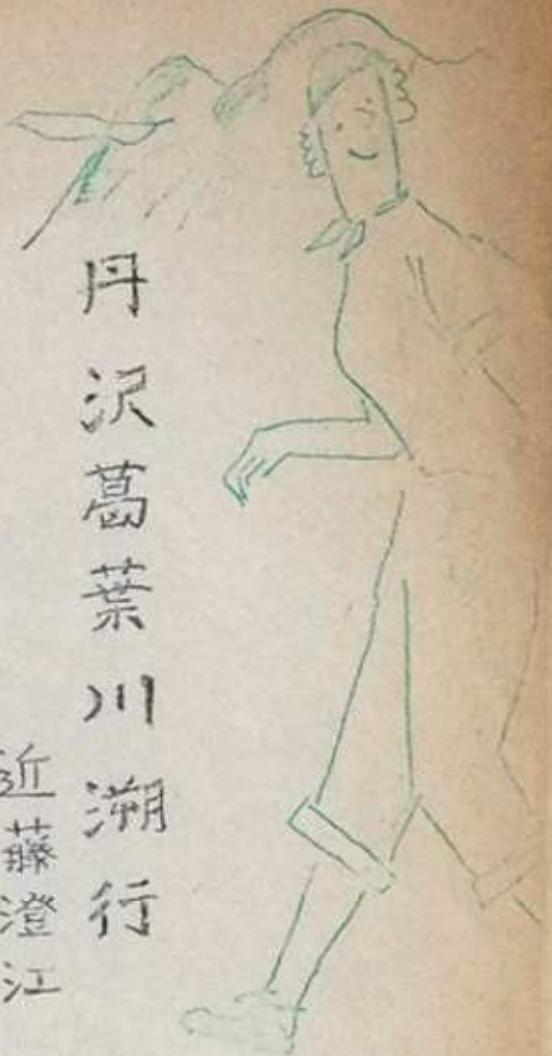
五、一、湯原小屋まで一晩でのり。



# 丹沢葛葉川溯行

近藤澄江

（期日）六月二日 晴  
（メンバー）筒井、並塚、近藤



バスを降りると、あれた三ツ塔と丹沢山塊の稜線が眼前にそびえていた。小田急の車両ではその頂をあがかに見せて、いるだけであった。この山々も今、此處に立つて、この晴るゝ山容を見た時、私達の心は晴れの小鳥の称な朗らかな気持にならざるを得なかつた。簡単な身仕度を整えた後、他パーティの間を山麓の部落を縫つて、つま先上りの岩に登つて、さうして立つて泡立つ溪流が我々を迎えてくれた。葛葉川に掛る櫻沢橋である。此處から指導標の指

板立の滝を過ぎる頃になると今まで列をしていた溯行者も三々五々とこの大きな山に分散してしまひ、初めて我々が山に登つて、さうして車両はつまりと意識するようになつた。そして全身が引等る様子緊張感によつて一步歩が慎重になつて、くとくと何故か自分の行為に不思議を種自信を抱き、世バライが巻き、峯の上に我々のパーティは岩に取付、坐り、ふくらみ、休憩を味う。

次第に我々の頭上が開けやがてこの沢で最大の滝である富士形の滝に着いた。水流は左岸の方に極くわずかにあるだけであるが、富士形の滝という名にふさわしく、クロ

テスフな感じのする所から、成って、さう遠であり、時々我々の上空に飛舞する雲を雨雲が雨具と同意しない。我々は一すいた不安をもつて、外には何等の不安を感じず、さて来た。此迄まで未ると今日仕事もひと時間度らずで目的の三の塔に着きるわけである。

二、三の塔の小窓をさるともう仄げ伏流となつた。三の塔の裏が目前、控え頂上さるわめた人の事。ひの歌声らしるもののがすこに聞えて

来た。若石の危険をみて左の支尾根に取付き取後急登を終つて展望の同様三の塔の頂に立つた。所に十二時三十分。

此處で一時間余りの休憩の後に下りをみて再び養生に下った。帰路今まで一度も立った事もないヤビツ山莊に立寄つて見た。その時、朝葛葉川主合の父で主合の五十年配の母人があの息子と思われる二人の音年を引つてこの峰にやつて来た。三人はそつ微笑み、林子におおいに顔を見合つた。そして我々が今日女子主合登頂成功を祝し、又このよのうな機会を持つ事を終して固く握手を交わし峰を下つた。

女性に親切な廣田氏が質問をもつて渡す手筈と至り、（）女子会心掛け食事の用意も降らなかつたが今後連絡不文へなま様、（）氏へは以當に女子会員の間でもふとくなつててたようだ）。其の三ドレーフではないかと、うか、坐つたが小窓まで深入したアントラ努力により今回のことは許可な事とした。

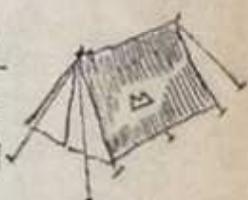
全報の論議、さうかりやうの苦勞を思ふと頭が下がるやう女子会は其のトミ塔まで頭を下げて歩つたので、開閉の影迫を此のうりとがつかり。

（變な久で、友な事の序きもオドコ達である）

五十年配の横にスマートなオバチマが主合のところと真黄色なつば付眼鏡をひがく遠を指す耳は本当に頬のもの、隣り、誰か口の中であさうた、とつぶやいていた。（光陰矢の如しとやら、す、貴の方もオバチマ族となるます）

一一の倉の誰、（）の勇姿を見られ下れ念だつたが、今回の女子へ貢め若狭を守る勇姿も男子会員に見せられず残念。（諸付て行けば荷物を持たれるのがあうです）

# 母校山岳部の歩み



母校浦和市立高校山岳部の山行の歴史を簡便にふりかえってみることにしよう。  
美穂の会員諸兄諸姉、童頃善良なりし昔日を  
しのぶよすかともし給え。

(記録の整理されていいる二五年度以降のみ。個人山行は含まず)

25年度(部長田原幸紹)

7.20.5.22 谷川岳縦走

1.19.5.20 大菩薩

奥多摩川乗山

26年度(部長辻勝四郎)

5.5.5.6 丹沢表尾根・主脈縦走

7.23.5.25 谷川岳

丹沢四十八瀬川勘七沢  
大穴スキーコース

27年度(部長吉田泰彦)

5.5.5.6 丹沢表尾根縦走

谷川岳合宿

3.28.5.29 八ヶ岳

三峯一雲取山

28年度(部長篠崎介二)

5.17 丹沢勘七沢

7.28.5.31 三峯・雲取山・甲武信岳縦走

8.2.5.6 谷川岳合宿

29年度(部長山崎弘一)

5.2.5.3 大菩薩嶺(富士山より初鹿野)

6.7.25.5.30 丹沢表尾根・勘七沢

7.25.5.30 谷川岳合宿(東西及びヒュゴー沢)

2.12.5.13 石打スキーコース

30年度(部長村田俊滿・松井千枝子)

4.29.5.1 丹沢水無川本谷

7.24.5.30 南アルプス(北岳・鳳凰三山縦走)

7.25.5.30 (鳳凰三山)(女三)

7.27.5.7 石打スキーコース

丹沢表尾根送別登山

31年度(部長秋池昌男・中村勝世)

5.5.5.6 丹沢表尾根(主脈を変更)駿迎登山

7.20.5.26 南アルプス(駒仙・北岳・鳳凰縦走)

8.2.5.7 白馬岳・白馬鑓(女子)

10.7.5.8 笠取山(埼玉県岳連集中登山)

1.6.5.7 石打スキーコース

3.23.5.24 丹沢集中登山(水無本谷セドの次・勘七沢)

(美穂合同登山)



## 山岳書紹介(その二)

A·F·マンメリー著

石一郎 訳

登の名挙を求める登山に代つて「スホーン登山」を提唱し、山の危険と困難に直面して之と闘うことに登山の眞の精神があるなどと言ふ所謂マンメリースムを主張し自からそれを実践したのである。

「アルフス・コーカサス登攀記」

(朋文堂)

マンメリーは一八五五年英國に生まれ、前号で紹介したヘルマン・アルボルが初めて登頂に成功したヒマラヤの八千米峯ナンガ・パルバットで一八九五年八月三日を最後に、行方を断つたアービニストである。

彼が近代スポーツ登山の祖と云われている由縁は、やはり前号の扉にのせられてゐる「登山の本領は頂上をもやめる」とあるのではなくて困難に打勝つたのに如何によく聞つたかにある。どう彼の言葉によく示されてゐる。

一八五九年から一八六五年(ワインパーによるマントーホルン初登頂)に至る七年前、アルフス登山の黄金時代の花が咲き、もはやアルフスには初登頂を狙うべき高峯は残らず、而もマツターホルンに於けるあらアクシデントを以て痛手を負ふ事無く登頂に成功した。然しアルビニストは

古典の引用等非常に多く、凝った文章で難解であるが、註があるのでいくらか助かる。山岳書の古典として、ワインパーの「アルフス登攀記」と共に、一読をお奨めする。

(事務所にある主な書) アルフス登攀記、サイルのトゥフ、青春の氷河、日本風景論、青葉・高麗の旅、山谷放浪記

里

(3)

筒井滿榮



安いもの、美味しいものが条件  
となりますが、簡単に出来ること  
をいくつかあげてみましょう。

鮭よりも安く、山での煙、製の味もよ、もの

中尾四十円位（五・六人分）

### 一、パン食に

。胡豆チーズ……胡豆を細々切りその間にチーズをはさむ（うにでもよ）。残雪のある時は短時間の中に入れておくとなをよ。ビルを思ふ浮べる人がめうとうな料理。

。胡豆の古漬……台所の醤味噌の中から古くなつた胡豆を二、三本持つてくる。バターをぬらしパンの上にのせるとピックルス（西洋の漬物）のよくな味。レバーペースト……レバーをひいたもの一小四丁円、ハム、ソーセージの代りに一缶リックの牛に入れると便利

。玉葱のマヨネーズ……本当に薄く切った玉葱をハニの上にのせ、マヨネーズをかける。ピリツ（辛味）がおしい。但し臭氣の強いことを覚悟する事おやつに

マシマロ……雪渓のあるところへは一袋どうぞ50円ふわくしたマシマロにナイフを入れ雪をほこむ。即席アイスクリームするめ……一度氷にしとめて塩をつけて焼き網で切つてかく、疲れをいやすによい。

干鰐一枚二十円位

。にしんの燻製……料理とは言えませんが

# 一の倉生活

五時をすぎて一つ大きく深呼吸してからテントの口を開め、一ヶ沢を离れる。一の倉本舗に着くとテントを張つて、一パーティ(二人)に出会い、此处で肉を煮て入り込んだ肉汁、御馳走になる。バックに食物にありつく日だ。

× × ×

## 二の沢右股

六月十五日

二ヶ沢と別れて二の沢に取付いたのが七時、よくスラブが知る。斜面の上部の雪塊がくつれてこぐくとなりながらすぐ傍を落して行く。今日は一の倉には外に人影も見らず、鳥帽子が、奥壁が、朝日は黒々と輝いて葉、かるようにおと、がさつて来る。状況だった空にも何時どの向に清水峠あたりに雲が湧き出している。今日もガスの出るところに登り切らなければならぬ。

土合から百メートルを登ると、沢が深く切れ込んで正面大きなノツベリとして滝を見る地真に出る。此处から先は左手からクラック状の岩溝が一本入ってて沢沿いには登れない。左の壁をトラバース意味に登るのだが少々気分のよく余りこじろだ。少し行くと灌木混りの草付が現われる。根のスラブするシマクナカをたまうにして比久を登り切ると水流の小さなスラブ左股が現われる。さあやがて跡に従つてスラブをトラバースし草付を横切つて本心と右股の土合に出る。上部に残雪をもつている鳥からしおびやかに朝がやつて来た。

ヘメンバー  
ヘ天候  
辻単独  
晴

月明りをなによりに旧道を歩ひて三峰羊マチカ沢の出合に着く。テントを立てお茶をわかす。駅から一諸になつた新湯から未だ人からチマキをもらって食べる。月が西黒尾根の上に横そばの白くマチカ沢を照らしている。やがて同行者がマチカ沢へと消えて、誰一人いなく田道に東からしおびやかに朝がやつて来た。

坂は水流も殆んどなくクラシクとなつて落込んでいる。

本谷と別れて少々登ると上部は開けて一帯スラブとなる。

但沢上部からの支沢をさけて左手にルートをとる。振りこ

る肩ルートをどうとつてよいか今一難が、折り下り堤壁を

下りて順層のスラブをえんぐと登る。次々岩陰に

小々の花が風になびいてゆれている。やがて本谷との境

尾根の凹んだ方に出て、本谷大滝の展望台といひめて、

するところだ。大滝は雨にも勝る見るところだ。後ほの

岩にセルートも如意してから此處を离れる。

右斜面はなるもズラブが續き、上部一帯は累々としたバ

ットレスが現われる。水のわざかに流れるクラシクを察する

ながら登り続けるとルートは三本に別れる。右手のみ不

のルートは人跡なげとの境に作るバットレスに急なクラシ

クとなつて入り込んでいる。左をも左手のスラブを登る。

二、三十分もスラブを登ると草が付き始めてやがて上部はヤ

ズと草付の混ったバットレスとなる。此のバットレスには

ルートが三本認められ、左手のヤズの中のルートが最も短く

次いで中段、右手のルートが木版どりの尻尾根に突上りで、

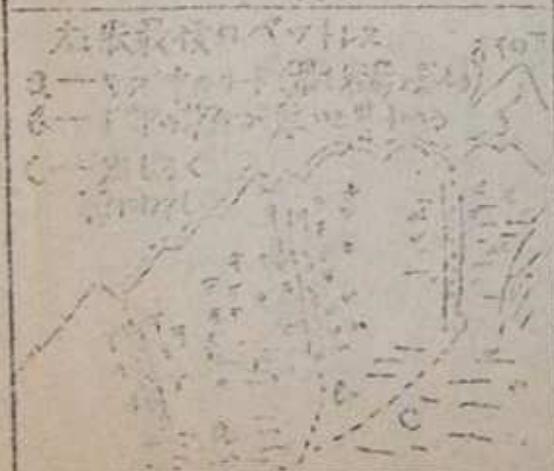
バットレスを五、六示し登った頃、夜行で一睡も出来なかつた悪コンディションが災いしたもののか、いきなり片大

が痙攣を始めたのである。しかも更にことにこのバットレスの下部は殆んど垂直の上岩が脆く雪の消えたばかり

の草付は極度に濡れていて殆んど身動きも出来ぬ状態に陥入ったのである。遂もなく此處で力がかな

上図Mより上部を見る

B.Cは俗に薙糞ルートと言ふれる  
B.Cは俗に薙糞ルートと言ふれる  
B.Cは俗に薙糞ルートと言ふれる



## 一の沢右段 ルート図

ホールドにたより下ら、うまくもな、煙草に火を付けて氣を落着かせる次第となつた。

俯瞰すればバットレスからスラブへと右股は落込みで、そのはるか下には本谷の雪渓が此處まで落ちれば會なべどと言わんばかりに不気味な広がりを見せてゐる。

知らぬ間に上空には雲が巻き出して、岩つゆのヅモをと鳴って眼下をかすめる。なまぬる風が頭上から吹下してスラブを渡つた。……それから三十今、本谷との境界尾根に辿りつて、ようやく生と死のあいから脱した時、あなたがその時を待受けたように国道築線からかスガ一の倉へと流れ込んで来た。

去末するかスの切れ間に舞うトンビを眺めやうとまづら「やれく」という安堵感が思わず無聲となりにどかっと腰を下させるのであった。

オキの耳から「ヤツホ」という呼び声が聞えて来た。

（タイム）

一の倉出合（六・一五）——二の沢出合取付（七・〇・〇）  
本谷、右股分岐（八・ニ五）——大滝凝望台（九・〇・五）  
滝沢スラブ上部からの枝沢との分岐（九・四・〇）——最後のバットレス下（一・一〇）——本谷との境界尾根（十一・〇・五）——オキの耳（十一・ニ〇）

#### 八後記

二の沢右派は岩場としては快適でこれと言つた悪陽ほ少を。まつともぞれはルートを間違えなゝ時を言ひるのであって下手にルートをとれば一の倉でも屈指の悪い壁にぶつかつてしまふ。従つて右股ではルートの選択とどう事が大きくなる。次いで最後のバットレスが問題となる。此處の草付きの悪さは相当なものである。早くヤフの中に入りこんだ方が賢明であろう。なをルートは大体本谷との境界尾根に沿つて登れば衰へようだ。

×

×

×

マチガ沢出合に寄つて見ると朝出掛ける時にはなかつたテントが二つ、三つ立つていて、いくつか帳やかになつていた。一人のテント生活はちとさびしいものである。早々に夕食を済ませて寝ころぶ。六時頃来ると思われた御走棒も現われない。これはすっぽけられたかなと、うつらくしてみると八時頃テントを外から照らす奴が居る。やがてテントの口があいて「よつとくくたびれたテントだな、遠くからで我々のテントはそれとすぐわかるよ」と御大が入つて來た。お茶をわかし、飲んですぐ寝る。

六月十六日

# ニシモツ上部 B レンゼ

村田俊満

竿を洗う様な滿員列車の中で仮睡すること四時間列車が水とすがる頃、ようやく東の空が明るくなる。相当数の登山者と共に土合駅に降り立つ新鮮な空気を吸ひ込みマチガ沢山合に向う。

マチガ沢到着四時、二、三のテントが張られ先月の林を喧嘩した感じはなく静かなキャンプ地となっている。昨日先行した山縣顧問と辻会長が溪谷のアーチの入ったテント（一番くたびれていた）の中で静かな寝息を立てていた。

一休みの後、食事を済ませ、出發する。

相変わらずマチガ沢出合をすぎると登山道の姿がぐっと減る。約三十分坦々とした昔の街道を北上すると、急に大量の残雪を抱えた一の倉沢の全貌が眼前に展開する。いつもながら我々を感圧する烏帽子の岩壁。雪を被んだ二、三の急峻なルンゼ等が我々の登攀を拒

むかの林に立ほだかっている。

左からかかる一の沢とも別れ愈々急となつた雪路を進む。我々はスラムに入ると五、六人のパーティが先き急いでいた。我々も此々で革鞋に履き替えそのパーティの後を追う。時々シュー・シューと落石が我々の頭上をすのとぶ。こんな岩くずでも当れば出血ぐらには避けられない。

ともうぐ三名無事に南稜アラスに達し着く。矢月から南稜の上方で四五人の声がするべ姿は見えない。時々ガスが切れこの沢合附近で厚渓練習の人々の一団が見える。

小休止の後テラスから本谷バードへのトラバースにかかる。ニルンゼ右岸のリツジに一パーティが下イル確保で上部への登攀を行つてゐる。（寝なぐにルートをとつて、るなど思つたが、この連中もニルンゼに入るそうで本谷バードが雪の下のためニルンゼに入つて仲々進まない。我々もめである。）相当に用意と見て仲々進まない。我々もこの後につづて登る。しかし余り待つ時間が長いとのリツジからニルンゼを物色、雪の下が薄れそうなのでトラバースしてニルンゼに入る。他の連中はリツジに取付けているため我々

ガニルンゼへ一番乗りとなってしまった。

ニルンゼは割合ホールド、スタンスとも確立しているので技術的にも精神的にも気が楽だ。たゞ岩がぬる／＼巣が見られ、我々の姿を見てするべ、鳴き声を残してとび去って行く。

きっと僕を、登山道ならこの巣を落とすと試みるに違ひない。しかし仮にも一の倉に入ろうと思うクライマーであるなら、この巣のかけ方の巧妙さに舌を巻き、感難の声を発するだろう。

さてニルンゼに入つてから一時両半もたつたろうか左と右にルンゼが分れサウナルド並、ここを知らせてくれる。我々は右ル

ンゼに入りをも急傾斜の岩壁を登る。たゞ一晩度感はないがスリップの危険率は充分にある。

この時南稜方面から(かスラの視界全然妨げず)渾沌の落石の音く、二、三人の叫び声が聞えた。さては何かあつたかなと耳をすませ次の音に神経を集中させる。後で解った事だが、南稜を登つていた先のペーパーがハーケンを打つために、岩くつを故意に落としたのだと言つて、いた。

その後何等事故の様もないようなので我々もホント安堵の溜息をもらし、そこから先を急ぐ。十余も

登つた頃、ポツカリとホッテルに飛び出した。こゝからちつと下降し、広河原に達する。

A、B、C、D各ルンゼの厚渓の水を集め滝々として空間に消えていく。広河原で昼には早いが焼豚とパンの昼食に舌づつみを打ち、周囲の岩壁に見入る。三十合の休憩の後、Aルンゼが厚渓に埋まつてゐたの

ニルンゼから大きくからんでBルンゼに入る。企ヤルニゼから離れて周囲のバットレスに取付けたいするが、この辺の岩ばかりで、岩の裏側もよくトレーニングには該当しない。大分行つてから頭上を見ると、三人そろつて落胆の声を發した。どうやらは懸垂の生えて、る稜縁らしいものを見えて、いる。

そんな所懸垂があるものかと毎日自分の眼を凝つたが遠くに見える稜縁まではもう二、三時間かかる、とだらうと思われたからだ。もう一時間も登り予定では三十分ぐらうで後壁に出られるだらうと思つて、いたがらである。しかしこうして、とても致の方など、う事になり又登り止めたが、その直後遠くの稜縁の道がとけた。

それは後壁に残つて、一メートルほどの雪と光景とがスによって出来た我々の複雑の誤りであつたことが解つた。もう飛沫まで一枚足の距離であつた。

丁度十二時、Bルニセの頭と称されるオモの耳向近が  
の稜線にとび出すことが出来た。

下降路は先月降いたマチガ沢ニの沢をスリセード  
で下る事とした。しかし此々で思ひぬ失敗を招くこと  
有つた。と、うのは少しは切れているだろう位に思つた雪  
渓が何くズタ<sub>ク</sub>に切れてて雪渓通しに下降本末全  
かつたのだ。

えら、苦労をしてマチガ沢本谷に下り立つ事が出来た時  
にはへとへとバテていた。(そいえいくと我が賢明な会  
長御大はとへと独り歳剛を下つて御所人の一時間半  
も前にテントに着いてお茶を飲んで昼寝をしていたという  
からさすがである。)

だが、もながら感ある高度感に悩まされたあの岩壁  
みの危険極まりなかつた雪渓の征服感とも満足感とも  
つかないものに満されつ、下山した。

ヘメンバー  
ヘ天候  
ヘ雲  
ヘ村田

ヘタイム

マチガ沢土合(六、一〇)——エボシ取付(六、五五——七、〇五)

——本谷バンド(七、四〇)——広河原(九、四〇——一〇、一〇)  
——ルンゼの頭(十一、〇——一〇、四〇)——マチガ沢土合(三、〇〇)

## 会務報告

一、今月の山話会は来る七月十日(木)六時半より  
山縣顧向室にて開きます。同山話会で今夏の山行  
計画の最終決定を計りますから別記プリントを  
良く検討の上会員各位必らず出席下さるよう。

一、今後如何なる山行に当つても原則として事前に  
そのコース、期日等を事務所まで報告し帰還後  
は直ちにその旨を報告されし。特に寄金は次登  
り、大きな山行、単独行等の場合は、れども厳守  
すべし。

### 一、寄附金

山縣昌彦	一金	五百円
島本健次	二	二百円
大武昭雄	二	一百円

### 一、寄贈

ビックル	一本	山縣昌彦
山と渓谷(一八四号)	村田俊満	

# ジヤンタル・飛驥尾根 登山

山崎弘一



前日の北穂、前穂に続々て今日はジヤンタルの飛驥尾根を登攀する幸に至った。我々食事保り

の者は未だ明けやらぬ四時に起床して朝食の用意に取掛つた。さすが洞沢の夜明けは肌寒く、やがてあたりは次第に明るくなり、こう洞沢にも朝がやって来た。六時十五分に朝食を取り、登攀準備も忙しくハーテン、ハンマー、カラビナ、下айлそれに弁当

五寸幅の袋込んで七時十五分にベースキャンプを出発

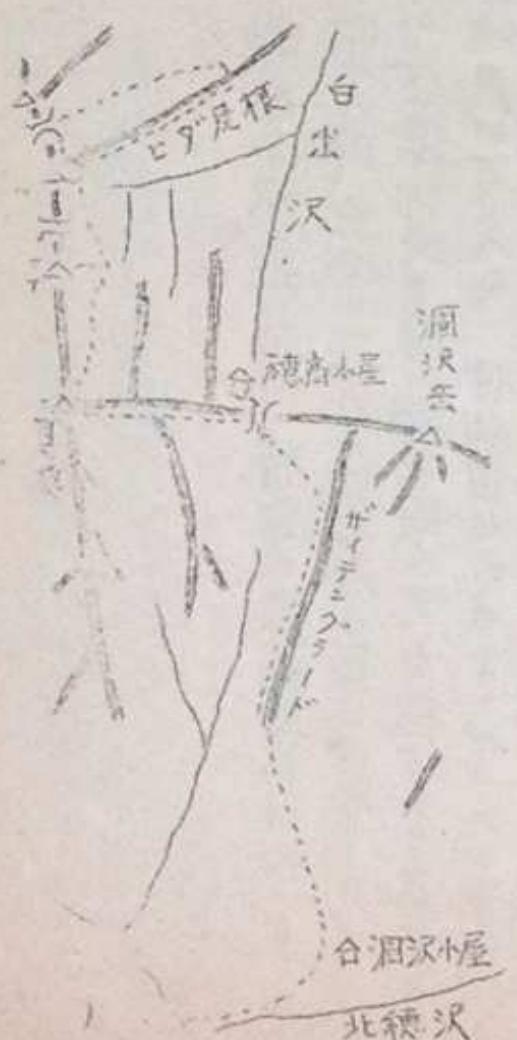
した。まお我々のパーティは総数は八名である。私のパーティは〇三人がトップ、私はミドルになり、ラストにはM三人が余った。洞沢の雪渓を渡つて北穂沢の木立のガレ場には、色とりどりのテントが張られていた。その横をよこ町の洞沢小屋の前を通って穂高小屋のある鞍部を突上へて、右側を目標として登る。比較的足場は良く、ジブアフルなコースを三四十分登ると一すこなお花畠めりそこで小休止して洞沢岳や前穂等を眺めながら記念写真と洒落込んだ。次第に高度を上昇するにつれて我々景色は良くなり洞沢一帯がまるで箱庭の様に見えとても美しく、前穂に眼を移すと興穂に走るツリ尾根がスカイラインを描き出している。この様に周囲の景色を見とれながら登つてようすに八時五十分穂高小屋に着いた。

この時分から洞沢側からガスが掛け始めた。小屋の前からはジヤンタルの全貌をほしょくに我々に見せてくれた。小屋の裏より急登りをベンチや梯子に駆かけながら登ると正面に穂高の頂上が見え、その向には数人のパーティが居た。右手にはジヤンのガットリ

洞沢は完全にかスって何も見う事は出来なかつた。シャンへの怪は頂上の下を越えて行く。この時未だ一度留鳥を見る事が出来、それをカメラに收める。雷鳥も見えた事もなく、又是非見た、と思っていた親子づれの鳥の事である。又それを岩尾根を下り、別れを告げ、切立つた様な急な岩尾根を下り、グランドツルムのコルに十時十五分に着いた。ここで少し早めに腹ごしらえをして十時三十五分に立つ。〇Bの人と丁さんはシャンの正面を登攀すべく庚に右下へ下つて我々と別れた。庚さんは彼等の姿が見えなくなるまで見送り成功と言ふと願つて登攀に掛った。かなり変化に富んだ谷間の林を徑をぐんぐん登り徐々広くなり日の前を原野と曰ふにによつミリと二十木位そびえたつシャンの頂を見えて来る。頂からは女子を運んだペーティが降り始めていた。我々はシャンを越えて下の方の長い枝を落とすと下へ飛駆側へとがと場を西十今からぐぐくと下ると草付のテラスがあり十一時十分に取付に土だ。そこを登攀準備とし一ヶ月、三人のオート車で十時二十五分登攀開始した。山の上には二本く全く今までに行つて来た。ドイルミスといふ、ジソウなど

本登った處に新し、ハーテンが一本打つてあつたので、これを利用してサイル工作の練習をする。登攀中に充分注意を怠らなければ危険はないが浮石が多いために、思わぬ事故を起す事がある。時間のすぎるのも大體登る方に岩尾根に着いた。

此だから見るシャンは実に壯麗だ。正面の岩壁が頂上より下まで一望に見え、よく見てみると中には入ることなくして恐怖心をも満ちて来る。この時間は大休十五時頃だった、ところへ空腹を感じて来た。全十四、五木の千ムニーベア、それをひさんバック、アンド、ニイで乗じ越した。岩マテの生えてる黒サテ



した岩にビーラムが快適に喰付、二、三ヶ所困難な場所があつたがようやくこれを乗り越し、一時三五分でシヤンの直下に到着し、ホイルを解き互に完登を祝禧し合つた。しかし正面をやつた二人は我々の先に到着していた。直ぐに冷たい食を頑張りながら、話題に花を咲かせてしばらくは皆何もかも忘れて自然の中にうちとけて行つた。そのうちホッカイと雨がやって来たので早々に出发する。

シヤンの頂上に立つた時は、塵々土砂降りで完全にスマーロードになつてしまつた。この雨ですつき岩が滑れてしまひ、ビーラムの効力を失い、七十度ぐらいの下りなので足場が悪く足をガクガクさせながらようやくにして下る事が出来、帰路を急ぐ。

奥穂に着く頃は雨も小降りになり奥穂からは一向前に德高小屋へと急ぎだ。しかし小屋では休まず下り下りテントを下る。途中で又雨に会い二度も濡れぬらず全く傘ながら、四時十五分に寝台のベースキャンプに全員無事に着き、一日目行程を終えた。

信濃追分駅は静かだ。精算の爲、事務所のストップを回んだ時、自分は高原の駅に居る事を自覚した。さすが冷々空氣で霧が林を囲んで、彼方からカツカツの鳴声が耳に入る。仲仙道は昔日のまゝだ。たゞ東京帰りが、トラックがほこりを立てゝ夜明けの部落をシッキする。しかし此のはミリもすうっと霧にすゝ上げられて、このでいつも正倒的な、やらしさはない、妙なものだ。天気さえ良ければ浅間山がすぐそばに見えるのだけれど今朝は駄目だ。それだけに静かさにひたれる。

フロジとしようが期待通り満席だ。木々の若芽も美しく、あわや緑色は全く新鮮を感じた。血の滝と呼ばれる十数メートル滝はめづらしく、赤茶けた水の色は、かにも火山のもつ滝と憶えた。なんでもドナウ河はこんな色らしい。そしてドナウ河が青色に見えるのは、シュトラウス位いだそうだ。それもエーフにいると赤くなる。この辺は白樺の美くい林だ。その白い幹が緑色の草に映えてうぐうぐ強く鳴いて耳もとを飛んで過ぎた。

## 静かな山あるき

(追分高原)

彦泰田吉  
<6月16日>

# 歩慢樂音(4)



## 序曲 四 古 疾

がて「日の出」明る、太陽の初升か全合奏の最初  
に輝やかしく現れる。時は輝き心は喜びに躍り立  
つ。山もほつき見え。さて本発だ。

### 第一部 登山

森を抜け峠と、岩壁を越え、ひうひうとした小川  
のほとりに出る。滝がある、ハースの美しい音色は音  
樂を両へるの外、実際そこには居らのが判らなくな  
る。この美しさは決して忘れられなく。ホルンに導かれ更に進  
むと山の牧場に出る。実に愛持が良べきて又岩場の出  
現だ。いまく目標す山が見える。心は踊る、遂に氷河の  
上に出た。苦労した効があつた、これからも危険がある。  
一休止する。明るいまほゆ、氷河、しかし遠く雷鳴が聞こ  
る。山人は頑張つてよろのきながら進む、「頂上」だ。

### 第二部 頂上

「よく目標に達したりだ。しかし汗して狂喜で表わ  
される喜びではなし。山は無数の問題を含んでゐる。だが  
故處の念めるのみ。そしてあたゞが次第に暗くなつて来た  
「霧が出て来たのだ」崖に立つても知れない。遠くは聞こ  
霧はこめ、日は暗くなる。野鳥も不気味な叫びを響か  
る。」とうく降って来た。山風だ。

### アルプス交響曲ヘリヒアルト・シユトラウス

アルプス登山の色々な場面を映画の杯に写実的  
に描いて何の苦勞もなく誰にでもすぐわかる最も  
描写的な標題音樂。

### 序、夜、日の出

全体への前奏、アルプスの景観を描く、山は雲  
海に氣高く大きく浮き出てだんだんはっきりする。や

### 第三部 下山

今未だ夜を下る。氷河を、山の牧場を、滝を、峻い、岩壁を通して、森を抜ける。前の時とは逆の順序で、その間、嵐は続く、オルガンが鳴り、管と打楽器が轟く。

終末、嵐はようやく静まり、壯大な日没となる。

もの、運搬車と化すに我々が燃料用として持込んだガソリンが漏れて車内はこの臭気でとても寝るどころではなし。同乗の人達には大変迷惑をかけてしまつた。やがて富士見下に着く。まず気になるのは空模様である。雨は降って、今は雲は低く深くかくがま、ており余り良い前兆とは言えまい。

单调にだら／＼と続く道を三十分程歩いて朝食にする。石に腰を下していると、寒いの晨馬鹿が立つて下り、<sup>（下り）</sup>、<sup>（上り）</sup>、<sup>（下り）</sup>、<sup>（上り）</sup>、<sup>（下り）</sup>、<sup>（上り）</sup>と、汗、汗、汗、汗、汗、汗と歩き出す。道は大人と登りになり、やがて残雪が現われ八時十分富士見峠に立つ。しかし残念ながらガスの爲視界は全然効かず、それに遂に雨が降り出して来たので急いで富士見小屋に逃げ込める熱い茶をごろごろになる。

一息入れ温たよった火で所の中を再び暖び太し先を怠ぐ。此處からは下り一方であるが峠の北側のせいか未だ一面に雪がつけており雪上の足跡をたよりに下るが、そのうちこの足跡がだん／＼みやしくなり、おかしいなど氣の付いた時にはすでに沢の中に入り込んでいた。

日期六月五日入日。

龜江資之

沼田に着いたのが午前一時五十四分、しばらく待ちやがて二時半富士見下行のバスに乗る。が約二時間どう



近に比較的新らし、足跡を見つけるので猶豫する。この次下ることにする。さへ下つて見るとこれが又大変で何度も岸を往復し、めづくの累強引なアスニギと来てるので

足不足の体にはぐっとこぐる。雨は相変わらず降り、そぞろとあるし足えはすぐるしの悪戦苦闘の連続である。やがてかすかではあるが尾根の中腹で人声が聞えたので、体を引げる林にして尾根へ出て二時三十分、つと正常な道へ出た時には五時間にわたる放浪とセブギの爲にその開放感で一同がつくとしてしばし無事と云つたところ。後は道標に沿つての全たくのハイケコースで皮肉にも沢中で散々苦労している時降り、た雨も止み時々行き交う人々もカサをして、るとロツト具合でまことにの人びうとしたものであり我々のまでも苦労が拍子抜けしたようで、情けなく思えて未だ今まで。やがて広々とした湿原の中に山小屋というよりも木館という感じの弥四郎小屋が見えてくる。

初めは此處に泊ることにして、だが温泉小屋に行く事にする。湿原の中の白線を引いた林を一すドの木を以てしたこの道はトメトメとした湿地ばかりを歩きて未だ足は非常に歩き良く、この道の両側に白く咲く水芭翁。やがて白樺の林にかかるまれた温泉小屋に着く。

今日の行程がこれまで全部終るわけであつたが富士見下り生で以未十二時間も要したと、うちは一すした記録である。

翌七日又も雨である。燧岳に登る予定を変更、九時頃小屋を出て三條の滝を見に行く。この滝は中、高さ六日光の華厳の滝をしおと、まさに壯麗。二十分程して列返し十二時長藏小屋を目指して雨び温泉小屋を出る。今日は四時間ばかりの行程なのでゆっくりと写真などさとしながら行く。昨日とちがい相当の人が出ですれ方がう時などは雨の中を廻の中をしばらく立つて、よくてはならぬと言つた具合。沼尻小屋附近では廻は増々大降りとなり小屋に入つて廻をどうしたが何と先客で一杯である。一時間ほどして小屋を出る。目の前に燧岳が頭をがんで、み堂々と座つている。残雪と濕原が奇麗に調和されて、これで天氣さえよければ申し令金ひぐであるが、樹廟期のこの月ではどうも仕方ない事かも知れまい。

長藏小屋附近には多くのバンガローが来るベシーズンを待つて来々と立つて、中に二、三のテントも見られ、我々も折角車い思つて持つて来た午前二時テントを張った。我々の目を引きつけ、また尾瀬のカンパンと言つたと云ふ。やがて白樺の林にかかるまれた温泉小屋に着く。

(終)

# 部長になつた話

山縣昌彦

昭和二十九年五月、浦和の市立高校に転勤。取締早々、教頭にハイキングのようなことは好いと聞かれた。

大体その頃の私は未だ山が好きだと言、叫れる程のものはなく、たゞ生來の放浪性と、何と全く富士の美しさに魅せられて中学時代から富士に登つたり、富士五湖を歩くなり、三ツ峠へ数回登つたりして、した程度であった。

「よみ嫌いではない」と答へると、早速山岳部長に選ばれてしまつた。後で知ったのだが、その度生徒会の部活動にはすべて教師の責任者がつく事が必要であると言ひ事になつて、各部に教師を割り当てるもの、山岳部には乍ら手があらず、丁度若いのが未だからと辟き構えていたのだ。そうだ。ともかく後半、山無しにはうれしき程の山氣玉になつてしまつた。そもそもの発端は此處にあつたのである。何も知らずに引受け放しておいた父、夏休みに入る前、生徒のキヤノンが相談に来た。谷川岳に行くからつけて来てくれと云うのである。本當はつけて来てくれ全くとも結構なんだが、教師が同行せねば学校は許さないから……。平日は連でやるから音楽に……と云う話で

ある。今から思えば彼等は大した奴等であった。何いろその塊一派等と私とは年令も近く、性格は似て彼等の方が立派であり、又新任の方々は人故師は許可も悪くは全くたらしく話せる奴を見込んだらし。(その秋、一夜彼等の首領達は月見の宴と称して元を下宿から引張り出し、人気なきオニノロ恵員室にグラントートを敷き、飲のなに手に強て食ませ、秋氣焰ちあけで果ては横小てしまつた私を宿直室にかづ込んで然と去つた。)ベースキャンプを張つてからにすば良のものを、わくくテント等重い荷をかついだまゝ、それに便りしないのにピックルをあ鳴らすに辟つてエクサカと西黒尾根を登つ。釜ヶ峰へ級走し、芝倉沢の湯檜曾川土合にアシトを張つたものだ。(最近までヨセ王部員の軽コース)

本が今の様に道も整備がゆきとが下、登山者も少なかつた。そこらとほ言え随分慎重な山歩きをしたものである。

然も初めて見た雪吹、岩のスカイライン、そしてお花畑、富士を見る時は異全つた感覚が私の心の中に湧き上つた。そこで安易な樂しかる山登り、調和された平和な山の美を聯める満足感とは別に何物か、そに見る事も私は知つた。この時私の心に跳び込んで来た何物か、次第に成長してきて遂には山の呼び声となつて断ち下私を山へ呼び戻すようになつたのである。

-仲間を語る(3)-

県小さんのはじめの素顔

K.T.



御走体に初見参したのは早いやうでもう七年前のことになる。駄頭だったかに連れられて放室に入つて来ると一口も口状を述べなつて又「ヌタ」と帰つて、いた。  
「あくまでも鼻の頭が黒いよ」とう訳りで以後我々は「鼻黒」をもつてそのニックネームとした。試験の時は「鼻黒、そら来た」とだらよがんべーい、といつた次第だ。

今回は我会の牽引者、山縣昌彦先生に御登場願う事となりました。「顧向だか難役だか判りやしないや」と言われながら斧足向もな、我会に一方なりぬ御尽力をして下さる因師には我等会員一同「やあやあ頭を垂れるばかりです、言葉にならず、感謝の念を筆に托して、此方にその房をねぎらわんが爲にさゝやかな一文を呈する次第であります。

この鼻黒先生、今は全徒の間では「ギ印」古以て通用して、いる。山氣狂いの意だそうだ。そう云ふは近頃の御走体は我々山仲間の眼から見ても少々尋常ではな、ようだ。恥陽ではそんな具合だから何をやつて、いるのかわからぬ。休日などに印宅を訪ねば、机にテインと正座して、姿にぶつかって「あやあや」急張に御精が出ますね」と覗き込めば何の事はない。無中で詫み睨つて、いる本は「八千木の上と下」「山は屋上より」と云つたたゞだ。ギ印もむべなるかなである。

題して「御走体を讀む」

御走体は漱石の愛読書である。それがあらぬか、御走体は「坊ちゃん」を彷彿とさせる。どう云ふは御走体・数学の教師だった。高校時代俺はしょつ太ゆう

X

X

X

この苦手な数学の時間をするのは、ひでえ奥をもらつた事を憶えてる。

「坊ちゃん」だから甘い物が好きだ。つゞくにはスシも好物だが、残念ながら江戸の子ではない。それなりに山梨の里、武田武士の末裔である。「坊ちゃん」は宿直を抜け出して温泉にひたつたが、御走体も温泉が好きだ。  
しかし大抵小さな山の湯だから坊ちゃんよろしく床ぐまは木床ない。西丹沢の中川温泉では口状書もみて「リウマチに効能ありと云々、人に知らせてやう」と師弟愛こまやかな所を見てくれた。

御走体の邸宅は一間である。此の部屋は現在、書斎であり、台所であり、物置であり、居間であり、客間であり、寝室であり、会話会場であり、つゞくの事にレコード・コンサートの会場でもある。

この邸宅にはW.C.がない。だから何の会合の後にはこの家の門前にはズラリと砲列がくられる事になる。

此處で御走体へ耳よりな話を一つ。何が野菜の種でも家の周りにバラ／＼とまゝておく事です。た

だしと等なコヤシが欲しかつたら、もう少しまじむお茶を飲ませて下さ。

御走体は早打ちの名手である。

小海線は日本最高所の鉄道だけに御存知のようにまことにのろい。御走体はこの車から外で目立つばかり、うあつしやつた。

「まったくのろいな、これなら車の前から飛びありて短打つて又最後の車に飛び乗れるな」

そのうち実験される事を期待しているが、これ鷺の谷渡りにあらずして御走体のレール渡りか。

御走体が快調とのたまう時は後続する者は往往にして調子が悪くなる。時にはこの快調の運転にいう事がある。金貨諸君よ、夢タマ御走体の後に従う事なかれ。しかばんば葉緑素を持て。

山梨には居られず浦和に移つて来た御走体は、今や山無しには居られない、お人となつてゐる。そして

年一度ぐらい山のな、浦和から山梨の実家へと戻つていく。

谷川岳合宿の時の事。W大女子ファンゲルの大部隊

テントを遠望しながら、御走体

「あんなに大勢居てどこでどうやって毬打つの人、

斯うがら心配だな」

邸宅にW.Cを持たない御走体は常人の及ばぬ

ところに気をつかうものだ。

几帳面、正確を以て嘔つた我等が御走体にも、

最近ハシカ狂ハが生じて来た。

「別紙アリントの如く〇〇の計画を立てまーた」なる

手紙を頂戴して、ハシそのアリントをうちものを拜見せん

と封筒をのぞいても入っていなかつたり、約束の日を「や、

うつかり忘れた」り、果てはテントを張る段になつて

「や、シートがな」、と云う次第。

年は取り下くな……ものである。

御走体の胃袋は特製である。ところが時には我の胃袋も自分のと同じ様に考えられる。大体御走体は女性にはまことに待遇がいい。あの詳細なるプリントを見給へ。ある時もそんな待遇振りにぶつかってY君大いに嘆じると、すかさず変色したスシと、

ぬる、茶をつべで「椅エツ子だつてねえ、お茶飲かねえ  
スシ食ハねえ」と来た。このスシたるや我々で保  
持にも手の本をつた代物である。いやんや我々にわ  
ざあや。御走体の胃袋はそんなスシでも無駄  
はしない。

旧制浦高時代の御走体の級友の半数程は、も  
はや此の世には居ない由。その殆んどが病魔に倒され  
て死んだそうだ。そんな中を切抜けて来る御大の  
事だ、流感などは鼻も引掛けない。だから席つたスシだ  
ろうが、犬のなのた岩魚だらうが、そんなものにはビク  
ともしない。

初めて放取につかれた時は、某学校の玄関えで本  
屋の小僧と同道された御走体も現在は十本百円  
のネクタイを締られ、これも腹屋から仕入れたがどう  
かは知らないがハリハリと一た背広を着用されて、  
生来の男振りを一層立せておられる。浪花の勝利、  
戈女を得られて御結婚の暁には、我々はさゝやかな  
お祝としてせてゆ一本百円位のネクタイをお送り  
致さんと心掛けて居るものである

(終)

記後集編

いよ／＼梅雨も去って夕立を見る  
候とはなれました。皆それ／＼今夏  
のプランを立てられて、る事と思ります。

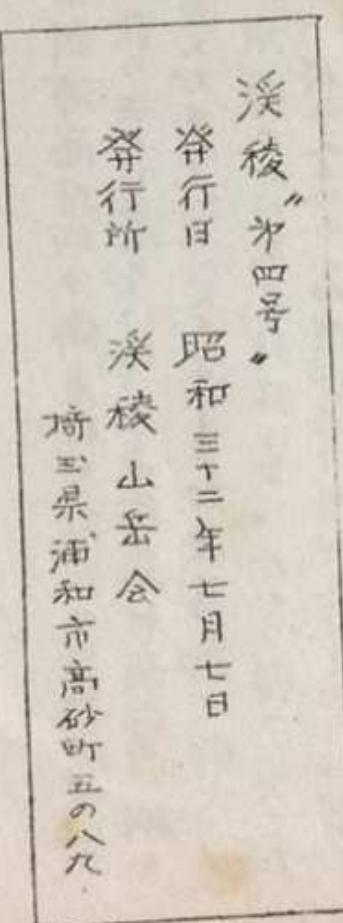
本号はつゆの中休みと云つた具合でページ  
数も減りました。

「仲間を語る」は特に三人に執筆をお願い  
致つたのであります。期日に間に合わず一文しかのり  
よせんでした。され適当な折に大武先生と共にアン  
コール致す所存です。「山と動物」本号は休載。

それにしても市岳連の動きがサッパリのようです。

副会長さん、副理事長さんもう少し張り切りま  
しょう。

次号は夏山報告特大号として八月上旬頃出し  
たいと思ひます。新人の山行報告、隨想等を大々的に





山  
果  
園  
會

溪棱山岳会  
埼玉縣浦和市高砂町五の八丸

m. Yamagata